
百鬼夜行のはじまりに・・・

パステルCollar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百鬼夜行のはじまりに・・・

【Nコード】

N8373M

【作者名】

パステルCollar

【あらすじ】

平成X年7月10日。私は大きなミスを起こす。それは学校で行われた肝試しでのこと…。旧校舎の鏡の前に来た時、全身が凍りついたように動かなくなった。ふと後ろを見ると鏡に映った自分、そして…白く、長い手だった……

#1鏡の中からこんばんは（前書き）

はじめまして。作者です。

もちろん初心者です。こちらではグロ系などを扱って行進していきます。

流血シーン、または暴力などといったものが多々あるかと思われるかもしれませんが、

それらが「OK!」「バッチコイや!」という方はぜひご覧ください。

かなりの駄作になりますので、そこは生温かい目で見守ってくださいませね。

#1 鏡の中からこんばんは

- キャラプロフ -

神崎 憐^{かんざき れん}（女）

17歳の普通の高校生。

以上で…では、どうぞ！

。。。。。。

「ったく。なんで肝試しなんか…」

毎年学校で行われる肝試し。今回は旧校舎が舞台で成り立っていた。そこには無気味なほどに大きな鏡が設置され、生徒は必ずその鏡の前を通らなければならなかった。

いよいよ私の番だ。鏡の前に立つと、そこには自分の姿と…真っ白な、長い手が無数にあった。

「ひっ！？」

恐怖で足がすくんだ…。

その手に腕をつかまれ、私は鏡の中に飲み込まれていった

・・・

#1 鏡の中からこんばんは（後書き）

はい。すみません。

かなりのグダグダでしたね；

もう少し頑張って進めていききたいと思います。

#2 空間の狭間らしき所で（前書き）

はい、ということ（どういうこと？）

今回もかなりのグダグダです！！それでもいいという方は「レッツ

ゴー」

をお願いします。

「はあ？やってられっか！」というかたは速やかに退場くださいな W
では…本当にいいんですね？

#2空間の狭間らしき所で

「う…ん…」

頬を生ぬるい風が吹き抜ける。

私はそれで目を覚まし、しばらくあたりを見る。

「あれ。ここ…どこ？」

たしか、旧校舎の鏡に引きずり込まれたはず…。なのにここには何も無い。

あると言えば旧校舎に会ったのと同じ鏡だけだった。あとは一寸の闇が広がっているだけ…。

「って、なんか変じゃない？」

ここは何もない（何も見えない）ような暗い闇の中。

それなのに自分の姿と子の鏡だけがはっきりと見えてるのはおかしい。

「やっぱ私死んだの？」

てことは、ここはあの世？

うわー。じゃ、ここ天国？地獄？こんだけ暗いんだから地獄か。そこかそっか。

「って、何一人芝居で納得してんだよおお！！」

私バカ？バカなの？！

「…っは、もうどうでもいいや。さて、どうやって帰るか？」

てか帰れんの？まあ、帰れないならそれでもいいけど…。

普通に考えたらこの鏡に引きずり込まれてきた訳だし。この鏡つかって帰れんじやない？

ためしに触れてみるが大して変ったところはない。

「…特に変化なし」

手を前に押してみると「ズプリッ」という気味の悪い効果音とともに手首まで入り込んだ（というよりはメリ込んだ？）。

「！？何これキモッ！！」

しばらくその状態で静止していると後ろから声が聞こえた。

でも、鏡には何も映っていない。

『お前、少しは怖がったらどうだ?』

「あゝあ?…って、誰?」

そこには自分より頭2つ分高い、同年代くらいの青年が不敵な笑みを浮かべながら立っていた　　・・・

#2 空間の狭間らしき所で（後書き）

いえーい！かなりのグダグダでしたね。

はい、すみません。：だってどう進めればいいのか分らねえんですよ！！

ごほんッ。取り乱してしまいましたね…。

ま、まあ。こんな駄作でよければ次回もお願いします！

#3 あんた誰？（前書き）

あれですね、サブタイトルからしておバカですよね。
はい。私は馬鹿ですww
では、さっそくどうぞ。

#3 あんた誰？

「……………」

『…………』

さつきから続く沈黙。

それは数分くらい前にさかのぼる。

。。。。。

『お前少しは怖がったらどうだ？』

ふいに聞こえた声に私は振り返った。

そこには自分より頭2つ分背の高い青年が立っていた。

「…あんた誰？」

『俺か？俺は妖怪の総大将、ぬらりひょんだ！』

わお、ホントに答えやがったよこいつ…。しかもすごい自信あり気に…。

何様のつもりだよ。（だからぬらりひょん…byぬら）

「…とりあえずここどこ？」

『ここはいわゆる空間のはざまだ。お前を呼んだのには意味g』お邪魔しました」

『なぜそうなる…！？』

鏡に向き直った私を青年が引き留める。

『人の話は最後まで聞けと教わらなかったのか？』

なぜいきなり説教をされているんだ私は…。

『そこで、お前に頼みがある！』

「…はあ？なんで見ず知らずの人の頼み聞かなきゃいけないの？？」

『頼みというのはな！お前に妖界の姫になってほしいんだ！』

「……………はい？」

・。　　・。　　・。　　・。

で、今に至るわけだが。

「いきなり姫つて、あんた頭どうかしてるんじゃない？」

『うぐツ…！』

あ、相当のダメージ受けたなこりゃ。

『と、とりあえず。フリだけでもいいんだ。だか「無理（キツパ
リ」

「私とあんたは初対面。だからむ」『初対面なんかじゃないぞ？』
・・・は？

#3 あんた誰？（後書き）

おっし！

今回も見事なグダグダっぷり！！

次回はどうなるかな…。

4 現在形で物事をみよ（前書き）

…これといったものはありませんね。
いつもどりのグダグダでどうぞ！！

#4 現在形で物事をみよ

「いま…なんて言っただ？」

『？だから、嫁にと…』

「違う！その次！！」

私の大声に妖怪（だからぬらりひょ：びょぬら）は驚く。

『お前と俺は初対面ではない…っと言っただ』

その言葉を再度耳にした私はその場に立ち尽くした。

『？どうかしたのk「よんな！！」（ゲシッ）」

思いつき妖怪の腹部をける。

『な あ！？』

・・・いま、微かにだが蹴った感覚があったような。

「……ッ？！」

『分つたろう。これは現実、真のことなんだ』

「うそ…そんなわけない！！ ……」

・・・

「！？（ガバッ）」

朝、私は自分のベットからとび起きた。

「…やっぱ、夢？」

辺りを見回すがどこか以上があるわけでもない、自分の体を見ても何かが変わったわけでもない。

ただ、左手首に変わった形のアザがあること以外には……。

でも今の私にはそんなアザのことなど目にも留めなかった（てか見て見ぬ振り）。

「とにかく、夢でよかったあー！」

いきおいよく戸をあけるとそこには、夢の中での存在であるはずの人物がいた。（何これ文！？）

「……なんだ、ずいぶんと元気じゃないk（バンッ
なんであいつがいるのよおおお!!

4 現在形で物事をみよ（後書き）

すみませんすみませんすみませんすみま…（殴

#5 変わりゆく日常（前書き）

・
・
・
・
・
・
・
・
○
(なんか話せや

#5 変わりゆく日常

「.....」

『（ここに）』

なぜだ…なぜこうなった!?

「…いつまでついて来るつもり?」

『お前のゆくところならどこまでも…』

今の私は通学中。

いつもなら一人でかよっている通学路。なのに今日はこの妖怪がいるせいで妙に体が重い。

神様…私何かしましたか?

「とりあえず、話かけないでよね!」

こいつの場合、実体がないため私以外の人には見えない。

つまり、周りからして今の私は非常に気の狂った学生に見えるわけだ、

『! 憐、あれはなんだ!?!』

ふと聞こえる憎らしい声。

「あゝ あ!?!… って、なんだ飛行機じゃん」

『ひこうき…あれがか?ずいぶん小さい…』

「あれは空を飛んでるからで、実物はもつと大k…」

違うだろおおおお!!

何こいつのペースに乗ってんの!?

『? 憐…どうかしたのk「うつさい!ついてくんな!」…』

私はそのままあいつを置いて走り出す。

- 学校 -

「おは…よう…」

つかれた、朝学校までの時間帯でここまで疲れるか? 普通…。

「えー、転校生を紹介する」

いきなりだなオイ。（何せ思いつかなかったもんですからb y作者

『奴羅里 彪ぬらり ひょうだよろしく頼むぞ、人間』

「？（ガタツ」

思わず席を立つ。

「ぬら！？なんでここに…」

私の声に周りの視線がやつと私を交互に見る。

（穴があつたら入りたい…／＼）

そして、私の人生は「ぬら」という存在によって変わりゆく
・

6 妖怪に狙われ（前書き）

逝ってらっしゃいー！／（。　。　／）

6 妖怪に狙われ

みなさんごきげんよう。皆の隣ちゃんです！
今かなりヤバい状況にいます。

『まてえ〜！！』

「いいやああああ！！」

なんと、只今妖怪に追われています。

妖怪といってもあのストーカーではなくて。

なんだろう、目が一つしかない上のこの上なくデカい！

（無理無理！あんなのにつかまったら潰されるのが落ちだよ！？）

手でグシャって、そりやもう内蔵なんか飛び出るでしょうよ！

って、自分で考えといて吐き氣してきた。

「てかなんで追われなきゃいけないのおおお！？」

「それはだな！」

いきなりの声と同時に現れるストーカー（通称：ぬら）

やつの会話文が二重カッコじゃないのは人間だからってことでした
承願いますby作者

「てか、出てくんの遅すぎ！」

「いや、貴様の母上が作る料理に感動を受けていた！」

こいつはアホなのか！？

「いいからどうにかしてよ！！」

「…ああ」

6 妖怪に狙われ（後書き）

……ごめんなさい。

なんならスライディング土下座でも……。

#7 定めと何とか（前書き）

…一遍死んできます。

（ロープ持ちノ？）

#7 定めと何とか

「早く！何とかしてエええ！」

「ちよつと落ち着け！」

するとぬらは妖怪に向けて（いやぬらも妖怪だけど）手をかざす。そしてかざした手に息を吹きかけた。それと同時にわきあがる青い炎。

それが一つ目の身体にまきつき、燃え広がってゆく。

次に見たときには目の前には原型も分からないような黒ずんだソレが転がっていた。

ソレから漂う悪臭。皮は黒くただれ、赤黒い液体が流れていた。

自分でもよく見れたよな、あんな未知のもの…。

「……てかさ、これどうすんの？このまま放置したらやばいんじゃない？」

「そうだな、後で処理班にでも任せるか」
処理班！？そんなのいるの！！？

でもまだ分からない、なぜ私はこの今は黒い物体に追われたのだろう…。

「ぬら」

「なんだ？」

「一つ聞くけど、なんで私追われたの？」
その問いにぬらは一拍置いて答える。

「これからもそうなるだろうな」

「は？答えになってない」

「おまえ、手首のアザはどうした？」

アザ…。何かを思い出し、私は左手首を見る。

（前より色が濃くなってる？）

「それはいわゆる妖怪族の王家の紋章のようなものだ」

「紋章…？」

「それがある限りは狙われ続けるだろうな。濃くなるたびに追いかけてくる妖怪も増える」

「じゃあ、なんでこんなものつけたのよ！！」

「知らん。第一それとつけたのは俺ではない」

は？だとしたらだれが……。

「だから俺がお前を守る。それが俺とお前の定めだ！」

「こんな定め嫌あああ！！」

#7 定めと何とか（後書き）

会話文多い！？

ちょ、説明文がほとんどねえじゃん（パニくり）

#8 黒いものほど好奇心を擲るものは無い（前書き）

…土下座してもいいですか…？（なぜ？）

#8 黒いものほど好奇心を擲るものは無い

「憐〜。憐や〜?」

「.....」

「怒ったのか?もしかしておこてて」うつさい!もしかしくても
そうよ!」

なんで私がこんな目に逢わなけりやいけないの!?
あれ以来妖怪に追われる回数が増えるし。
昨日なんか喰われるかと思っただわ!!

「.....もういや.....」

なんで、つい最近まで普通に暮らしてたのに!!
思いつきり高校生活満喫してたのに!!

こいつが来たたん生活が一変したよ!
疫病神かこいつ!そうなの?呪われてんの!?

会ったびに生気を吸い取られてく気がする。
その上、行く先々でこいつの倒した妖怪の死骸見なきゃいけないな
んて...。

いや、まあ。見なければいいんだけどさ?
でもついつい目に入ってしまうんだよ!!

「~~~~ツ!!」

私は声にならない叫びとともに机に突っ伏した。

いつか、元のような平和な日常に戻るのだろうか?

#8 黒いものほど好奇心を擲るものは無い（後書き）

はい。グロは…ないですね。

だって思いつかなかった！！

そしてサブタイトルも思い付き。というよりは作者の本心ですね。
いま頭の中黒いことでいっぱいです…。

しかもなんだ？今度は会話文すくねえ！？

#9 価値観のあるもの（前書き）

……なんか、視界がボヤケテキタ……。
……はい、ぶつちやけた話ネタが底をつきそうです……。

#9 価値観のあるもの

今日も妖怪に追われる日々。
やっぱり、あいつに助けられた。

（私は…ここにいてもいいのかな？）

不意によぎる疑問。

そんなことばかりが頭の中を浸食してゆく。

「…気持ち悪い…」

何に？自分の存在に？

妖怪の総大将に意味のわからない定め決められたから？

…ワカラナイ。

『なら、逃げてしまえば？』

いつそ逃げたら…。

『そうよ。逃げたらいい』

「……は？今の何？」

『クスクス。逃げたいのでしょうか？』

「！？」

『私が、手伝ってあげる。だから…その肉体をヨコセエエエエ！！』
「ひッ！？…い、いやあああ！！」

#9 価値観のあるもの（後書き）

…そろそろ、主人公殺して完結しようかな（おい？

大丈夫ですよ。本当にそんなことはしません。

にしてもなんだろ、この主人公。

更新していくに連れてキャラが分からなくなってきたような。いや、確実にわからなくなってきた。

誰でもいいから私にネタと文才と勇気！…（欲張り過ぎだ阿呆！！

#10 危機感というもの（前書き）

なんか、本当にネタがない…。

誰でもいいからオラにネタw（ドラ○ン○ールか！！

#10 危機感というもの

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

『ちょっと、何か言いなさいよ』

「いうって、何を？さっき散々叫んだじゃん」

私の目の前にいるのは、下半身のすけた着物の女。

『いや、だから。逃げるとかしないわけ？』

（やったところで何か変わるのか？）

「そもそも、あんた誰？」

『（そこから！？）わ、わたしは。雪女よ』

雪女・・・へえ！。

「…っふ」

『！？（なんで笑うの！？）』

雪女って、もう少し冷たい感じじゃない？

逆に暑苦しい感じだよこの人（？）。

「んで？私の肉体がほしいと？」

『そうよ！あんたさえいなければぬら様は！！』

ぬら…？

「なんであいつが出てくるの？」

『う…。と、とにかく！あんたに死んでもらう！！』

「いやよ」

なんで、そんなことで殺されなきゃいけないのよ！

意地でも生きてやるわ！！（？）

『そう、なら。後で後悔しても知らないわよ?』
「それはこっちのセリフよ」
互いの眼から火花が散った。

- 10分後 -

『む、無念...』

「よわ? てか、ホントに妖怪?」

『これでも妖怪です...』

マジか!

「お前ら、何やってる?」

ふいに聞こえた声。

『!ぬら様!!』

「雪女か!?なんでここに」

『あなたに会いに来たのですよ!』

...なんだあの人(?)の変わりようは...。

「...とにかく、私の命は誰にもあげないから」

『つぶ、いつか奪ってY(殴) D A M A R Eてめえ、あの世に召されてえのか?ん?』

「そもそも、私には向かうのが間違ってるのよ」

『ひイいい!!』

てことで、下僕が一人増えました

#10 危機感というもの（後書き）

あはははは（黙れ

これで主人公が妖怪によって死ぬはずだったんだけど。
なんでだろ、テキストに討ってたらこんなことに…。

しかも下僕にしちゃってる。

もう少しキャラ増やそうかなw

#11 新たな難関

「お茶」

『はい』

「漫画とつて」

『・・・・・・』

みなさんごきげんよう。

私は今新たな奴隷を扱き使つてるところです。

「？なに？」

『もういや！なんであたしが人間の奴隷なのよ！！』

「なんでつて、ぬらと一緒にいたくないの？」

私は口の端をあげ雪女を見る。

彼女はそれに表情をかたまらせた。

『あんた、妖怪よりたちが悪いわ』

「それはありがとう（にこッ）」

当り前じゃない。

会つて間もない妖怪の総大将に姫だの嫁だの、正直どうでもいいこと。

拳げ句の果て。変な妖怪には狙われ殺されそうになり。
なんでこんな人生になつたんだろ…。

『？憐…どうかした？』

「あ、いや。考え事…。それ終わったら買い物行こう」

『買い物？』

「あんたも、妖怪なら実体くらい作れるでしょう?」

私の発言に目を丸くしながら彼女は答える。

『…まあ』

「なら、いいじゃん」

『…うん』

さて、どうしようか?

#11 新たな難関（後書き）

ひゃひゃひゃ／（。。／）

すみません。壊れてきました。：多分脳の細胞が。

ん。さて、次は雪女と主人公のお買い物ですね。

そして、ぬらが出ていない・・・。ヒーローのはずなのに。

：とりあえず。適当に危険にでも合わせてみるか。：ふふ（黒

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8373m/>

百鬼夜行のはじまりに・・・

2011年10月7日15時18分発行